

サークル・奈落兎

予告小冊子

『人形の国は、
赤色の夢を見る。(仮)』

&

『その他』

■ あらすじ

夏が始まり、電車に乗ったその日——僕は迷い込んでしまった。

帰郷しようと思った電車。だが、その電車はいつの間にか機関車と化していて、星の海にある線路を走る、走る。

そして辿り着いたのが、奇妙な場所。

そこは、真っ赤な血を流す人間の代わりに、透明な血を流す人形たちの住む異世界だった。

次の機関車がやってくるまで、訪れた国——モルグ国で出会った少女と共に過ごす主人公。

だが、偶然訪れた図書館にて、変人で有名なウィタイン博士に目をつけられてしまう。

それから、彼女に尾行されたり、屋台で飯を頬張る少女と出会ったり、同居人の少女と交流をしたりする日々が続く——。

——唐突に、穏やかな日常は終わりを告げる。

演劇戦争に巻き込まれる者たち。狩られる人形たち。混乱に乗じて行われる争いの予感。主人公の前に姿を現すお姫さま。おまけに無知な博士の研究結果やら、お伽話上の勇者と魔王やら、銀河鉄道での旅やら——とにもかくにも滅茶苦茶である。

收拾がつくのかつかないのか、それはどうなるかはさておき。

人形たちが暮らす世界で、主人公たちの冒険が始まる。

なぜ、世界に人間がないのか。人形とは何なのか。

銀河鉄道の終着駅——そこで待ち受けるものとは。

——夏が、始まろうとしていた。

「さよなら、バイバイ。

——でも、またいつか」

■人形

透明な血が流れている。

手足がもげても死なないが、首を落とされたり、頭部を粉砕されたりなどで、ある程度まで壊れたら死ぬ。

あまりそうは見えないが、透明な血は舐めると塩辛い。まるで海のように。別に何も食わなくても生きていけるが、何かを食わないと餓えて狂う。そういうよくわからない存在。

某国の狂王コッペリア三十一世によって、人形の身体について様々なことが解明された。

人形の頭部には、赤いゼリー状のモノがあり、人形が死ぬと硬化して宝石になる。

その宝石を、人形たちは骨と呼んでいる。

透明な血に色を混ぜても、病気になったり死んだりしないが、まことしやかに囁かれている噂によると変人になってしまうらしい。

彼らは、自らを人間と名乗っている。

■モルグ国

本作の最初の舞台にあたる国。

コッペリア一族が初代の頃から、壱百七世に渡るまで統率していた。跡継ぎの壱百八世がいたが、数年前に姿をくらましている。現在は、壱百七世が国を治めているようだが……。

●エトカ

本作のメインヒロイン。

透明な血を流す人形。探究心が強く、無知なる群衆からは哲学者候補と蔑まれている。が、天真爛漫で、いつも明るいためそうは見えない。内心はともかくとして。

作中のムードメーカー。

「行こう！ リヒト！

あたしと一緒に、

世界の果てだろうがどこまでも！」

●アリペコ

本作のサブヒロイン。

飄々としていて、イマイチつかみ所が無い……ように見えて、そうでもないかもしれない。

色々なところを旅して回り、行った場所で飯を食うのが好き。人形らしくない人形だとか言われている。

飯の食い方は汚い時があれば、教育が行き届いているかのような綺麗な食べ方をする時もある。

一応、正体不明。

「ふむ。

やはり、君は笑っている方が似合っている」

●ウィタイン

本作のサブヒロイン。

通称、無知の博士。

自身の肉体を改造し、男性から性転換を果たした女性である（正確には、肉体を女性の形に変えただけとも言える）。

無知ゆえに、自身の透明な血に黒を混ぜた変わり者として有名である。自称も他称も、無知の博士。

人間の血が赤いことを、彼女はまだ知らない。少なくとも、リヒトと出会うまでは。

「——君は、

箱の中に閉じ込められた赤ん坊の話を知っているかい？」

●藤巻理人

主人公。通称、リヒト。

一応、世間一般的な男子学生。

好きなものは本とゲーム、あと演劇。

大して珍しくもない優しい性格だが、考えて行動に移すところだけはマシだと言っても良いだろう。

人形世界に現れたイレギュラーであり、赤い血潮を内側に秘めている人間でもある。

「そうか。それなら、この世界は——僕の敵だ」

■撒き散らされる言葉たち

エトカの腕がもげていくのを、
僕は黙って見つめることしか出来ないんだ。

黒一色の虚構。

「笑え！ 笑うんだ、幸福ども！
遠くで！ 人殺しどもの手が届かないほど遠くで！！
笑っているろ！ 笑っているろよ、人形ども！
人のように！ 人そのものになりたいと大声で笑ってくれ！！
僕も笑う。君たちのために笑う。
笑ってやるんだ、狂ってるみたいに！」

「ここは地獄だ。幸せ地獄。僕がいて、僕がいない。虚構。ハリボテ。ハッピーエンドで埋め尽くされている」

「ハッピーエンドも悪くはない。
けれども、そこに行きつくまでの過程がなければ——クソくらえだ」

夢見るハッピーエンド。

「見ろよ、この空を！
黒であり続ける、この世界そのものを！
群がっているのだ——全てを覆うように！
神が！ 蠅が！ 虫けらが！
埋め尽くすような黒い目で、私たちを見つめている！」

「夢を見るんだよ、赤ん坊。
煙草と酒の夢を見て——大人になった夢を見るんだ。
中身のない人形の夢を見るんじゃないよ」

「いないよ。いない。
夢見る僕らに、甘すぎる夢はいないよ」

全ては夢の中。

「ポケットの中にはビスケットが一つ。
叩いてみるたび、ビスケットが増える。
それなら——僕を入れて叩けば、増えるのかな？」

「目隠ししたよ、人形に。
ポッカリ剥き出しのガラス球に目隠ししたよ」

「私は胎児の夢を見た。
老人だった私が、幼くなっていく夢を見た。
幼くなって、胎児になって。
最後は——宇宙になって消えたのよ」

誰かのお伽話。

「幸福地獄と、不幸天国。
天秤が傾くのはどっち？
生きるか死ぬかを選ぶように。
始まりか終わりを選ぶように。
私？ 私はごめんよ。
傾いて決まるなんて嫌なのよ」

猿の脳と直結したタイプライター。
——時折、予言がタイプされて出てくる。

「嘘くさいご都合主義を綺麗事と抜かして——大人ぶってんじゃねえよ、クソが！！」

無知の創作。
感覚的物語。

「嗚呼、わたくしは——タマシイたちを救いたただけなのです」
「——わたくしの邪魔をするなら、神であろうと、作者様であろうと許しはしません」

■予告——もとい、意志表明

というわけで、同人サークル奈落兎の新作、

『人形の国は、赤色の夢を見る。(仮)』

現在、準備中です。

「……書ける技量あんの？」

冬野氷夜「私にもわからん」

「この野郎……それに、絵も背景も無い、というかスタッフやサークルメンバーが足りないのに……本当に完成させるつもりでいるのか？」

冬野氷夜「ちゃ、ちゃんと集めるし……（自信なさげ）」

「スクリプトも自信ないんだろ？ この企画、完成までこぎつけられるのか？」

冬野氷夜「か、完成させるさ……多分（震え声）」

「すごく無理ゲー臭いが」

冬野氷夜「いざとなったら、小説という形で発表するから……（逃げ道）」

「この野郎」

と、とにかく出るまで、気ままにお待ちください……。

「ところで、この企画が凍結したり、いったん保留とか、素材の貯蓄が済むまで製作が始まらないだとか、そんなことになったらどうするんだ？」

冬野氷夜「その時は開き直って、『孤○のグルメ』
みたいに飯を食ったりするほのぼの日常ものとか、
現代ミステリっぽいのかやりたいです……」

「……浮気性」

冬野氷夜「そのどれかをやる前に、ゲームを出しましたが」

「そっちを、重点的に宣伝しろよ……」

冬野氷夜「この冊子が入ってるファイルに、本編がぶち込まれてるんで、別に良いかなって」

というわけで、

『隕石に怯えながら、僕たちは。(仮)』

主人公の男の子と、謎の女の子が、落ちてくるかどうかともわからない隕石の話をするだけの物語。

こちらは、フリー公開準備中です。

「んで、具体的にいつ出すつもりなん？」

冬野氷夜「……もうちょっと、納得できてから？」

「納得できるレベルに出来るのか？」

冬野氷夜「一応は、完成させたから……（震え声）」

「それなら、いつから始めるんだ？」

冬野氷夜「もっとスクリプトに慣れてから……」

「慣れるまでに、今年が終わりそうな気がする……」

一応、今秋フリー公開予定。

あと、サークルメンバーも募集してます
ん。

「……それ、言わなくてもいいことなんじゃ」

冬野氷夜「尺が余ったんで、つい……」

■奥付け

2015/08/16 発行

サークル名・奈落兎

null.hall.rabbit@gmail.com

代表者・秋山ん @LittleWahuu

執筆者・冬野氷夜 @fuyunohyoya



奈落兎

naraku usagi